

『青年ミヘルス研究』(5)

—1905年：ロシア革命とモロッコ危機—

氏 家 伸 一

1) はじめに

A. S. Lindemann はその『ヨーロッパ社会主義史』で第一次世界大戦までの1/4世紀を「社会主義の古典時代」と呼び、その特徴をこう述べている。

工場労働者は、個人としては、社会主義運動のリーダーを提供せず、さらに、マスとしては、党と労組のリーダーシップを「より強力なプロレタリア革命へと向けて押し出すようなこともなかった。」

よってリーダーシップについては、「のんびりした、短慮で、直接利益にのみ関心を有する労働者大衆にいらいらしていたリーダーが、大衆を指導するエリートの不可欠性を認めたのもっともであった。」

こういう状況下で、1905年に勃発したロシア革命は、この「社会主義の古典時代の鍵となる欧州社会主義のエリート・マス緊張を激化させた事件」であった。このロシア革命で発生した「革命的暴力」は「当時の反実証主義的雰囲気」——それは、社会主義では、マルクス主義の決定的解釈の否定と、行動と革命意欲の強調を含んでいた——に刺激を与えた。

ツァーリズム・ロシアの倒壊は、専制的旧体制の「絶対王政」と、社会主義勢力と民主勢力の成長との矛盾の爆発に点火し、ドイツの同じよ

うな専制体制にも影響を与えずにはおかなかった。

1904年1月の日露戦争勃発は、旧ロシアの弱点を一瞬のうちに明らかにした。そして、ロシアが戦争を持ちこたえられないことが証明された。1905年1月、ペテルスブルクの大規模ストの発生、同22日のガボンに率いられた請願デモ、そして「血の日曜日」事件。これが「触媒」となり、民衆の反ツアー体制、反ニコライ二世の反乱へと発展していった。1905年夏、戦艦ポチョムキンの反乱、10月ゼネスト（これはペテルスブルクのソヴィエトの呼びかけでなされた）。

しかし、体制側がいよいよ始めた改革は中途半端なものだった。

ただ、ロシアで成功したゼネストは「西欧世界に重大な衝撃を与えた。」フランスではアナルコ・サンディカリズムの活動が活発化し、ドイツでも労働運動が活性化した。SPD左派はゼネストに、党を「受動的で不毛の議会主義」から引き離す何物かをみていた。

SPD左派では「精神の高揚した反乱するロシア対、無気力で違法精神旺盛なドイツ」の対比が喧伝された。理論的指導者のカウツキーも、プレハーノフらのロシアの革命リーダーたちやローザとの親交を介して、この「ロシア流のやり方」に感化を受けていた。

しかるに、SPDの大部分の穏健な指導者たちにとって、ローザの大衆ストライキ論は、全く「ロシア的」と映った。ドイツには不相当と考えた。というのも、それは、ロシアの代議制の欠如と、それに伴う秘密主義だが大胆な行動の必要性、に起源を有しており、ドイツとは状況が全く異なるからである、と。⁽¹⁾

ところで、ゼネストについては既に前世紀末（1891年と1893年）にベルギーの労働者が普選を勝ち取るために取った戦術として知られていた。第二インター内では、これを政治的・経済的闘争の手段とするフランスと、それに反対するドイツというふうに分裂していた。他方SPD左派のローザ・ルクセンブルクは1902年より精力的にゼネストを労働者解放の闘争方法として再認識すべきとする論争を展開していた。それらが事

実上目的達成するのに失敗したのは、リーダーの欠如と無力に責めがあると主張した。そしてロシア革命と同じ年の1-2月、ルール炭坑に自然発生的なストが勃発した。安世舟によれば、

「ロシア革命とルールのストライキはR.ルクセンブルクの政治的大衆ストライキ論に現実的根拠を与え、修正主義論争を通じて沈滞しかけていたSPDの急進主義に蘇生の切っ掛けを与えた。⁽²⁾」

そして9月に開催予定のSPDイェナ大会では、大衆ストライキが議論されることになっていた。それに先立って5月ケルンのFG(労組)大会は、政治的大衆ストライキを否定する決議を通過させた。

不思議なことに、ミヘルスはゼネストについてはさほど書いてはいない。おそらく、闘争方法としてのゼネストが適切か否かという問題に彼はそれほど興味をもたなかったからである。むしろ、党と労組の組織それ自体の問題、組織と運動の関係の問題、社会主義政治における理論と実践の矛盾の問題、これらが彼の中心テーマになりつつあった。この問題を考察する直接のきっかけを与えたのは、モロッコ危機とそれへのSPDの対応であった。

1904年4月英仏協商が締結されたが、それはフランスがエジプトにおけるイギリスの権益を認めるのと交換に、イギリスがモロッコをフランスの勢力圏として承認していることを意味した。それに反発したドイツ皇帝ヴィルヘルムII世は、宰相ビューローに促されて、突如モロッコのスルタンをタンジールに訪問した。それはドイツがモロッコを主権国家とみなしていることを世界に示すためであった。独仏の緊張が高まった。いわゆる第一次モロッコ事件である。

若い帝国主義国ドイツの発作的発露ともいべきモロッコ危機(戦争の危機)に際して、しかしながら、SPDは完全に無能力な本質を暴露してしまった。

ミヘルスは前年12月に Le Mouvement Socialiste に寄稿を始めて以

来、本年も5本の論考を発表していた。フランス・サンディカリスト・グループとの接触が深まってくる。

他方、P S I ボローニャ大会(1904年4月)とゼネスト(1904年9月)の後に生じた、ラブリオーラの革命的グループとの交流は、ラブリオーラの急激な革命的サンディカリズムへの傾斜と共に、次第に、ミヘルス・サイドに批判的要素が入ってつくる。

さらに忘れてはならないことだが、この1905年には、マックス・ウェーバーやゾンバルトとの交流が密になってきて、翌年にはアルヒーフに社会主義の科学的体系的研究の成果を発表し始めることになる。これは丁度、ミヘルスのドイツの社会主義と労働運動に対する幻滅が深まっていく過程と並行していた。

1905年までのミヘルスの政治姿勢うかがうには、この年初めに Le Mouvement Socialiste に発表した、S P D ベルリン支部大会報告文が参考になる。(N. 133)⁽³⁾

プロイセン州のS P Dは前年12月ベルリンで支部大会を開いた。言うまでもなく、プロイセン州はドイツ第一の州で、ザクセン州に次いで工業化されていた。従ってドイツの社会主義と労働運動に「最大最強の力」を与える州である。さらに、勢力のみならず、プロイセン社会主義者は「S P Dに最も革命的な色彩を与えている」と評価されている。それと対照的にドイツ南部の社会主義グループは「現実主義的で修正主義の傾向」を強くもつ。なぜプロイセンの社会主義者は革命的なく古い伝統にしがみつくなのか。ミヘルスは、政治的民主化の遅れによって説明する。つまりプロイセン国家は「最も反動的」でかつ「最も野蛮」な国だからである。逆に、南ドイツの政府は社会主義を体制内化する。「日和見主義的修正主義へと誘導できることを知っていた」というわけである。見やすい道理である。結局プロイセンの「田舎地主による暴力的反革命主義」は社会主義者を「革命」へと追いやったことになる。制限選挙のため、

社会主義者は議会から締め出されている。従ってプロレタリア社会主義者の「ラディカリズム」は、修正主義に転向する機会を見出せないというわけである。

従って、社会主義者にとって第一の目的は「プロイセンの時代遅れの反動」に対して反対の世論を喚起することにあった。その反動性を具体的にしめす三つの反動法案がこの大会のテーマとなった。

その一つの住宅問題では、「社会主義体制の下」でのみ解決可能だとする、古い伝統的マルクス主義（1872年のエンゲルスの見解）を再確認するだけあったと、ミヘルスはその戦術的無策を批判している。

宗教問題に関してミヘルスの立場は明確にラディカルだった。無力で生ぬるい無頓着な意見は、断固否定する。理由もはっきりしている。プロイセンでは、宗教が「国家の政治的ファクター」として法外な役割を果たしているからである。権威主義の強化手段となっている。「治め、命ずるものなら誰であれ絶対服従する心理」を子供に植え付けるのである。この点では、カトリックよりもプロテスタントの方で甚だしい、とミヘルスは評している。宗教はすぐれて「国家宗教」なのである。従ってそれとの戦いは「第一級の問題」にならざるをえない。しかし、この問題については、プロイセンの社会主義者のみならず、国際的次元でも「明確な戦術」は打ち出されていない、とミヘルスは批判する。彼の立場は、「教会から脱退せよ」のスローガンに要約できよう。「党员であると同時に教会に従うことは不可能であること」を宣言せよ、と。「党の近代的科学的本質」に従えば当然であろうし、そうしてこそ、「良心の篡奪者である教会から魂を回収」できよう、と。勿論、ミヘルスはそれが非現実的な方針であることは承知していた。実行されたら、国会議員の2/3は失われるであろう、と。ミヘルス自身も適切な戦術を見出しかねていた。

最後に、ミヘルスは州議会での普選を獲得するため「あらゆること」を為すべしというベルンシュタインを正しいと支持している。漠然とした一般的な目標のためのプロパガンダは「猫しか困らせない」と嘲笑し、

普選のための「大衆デモ」を要求したベルンシュタインについて、ミヘルスは、「彼の反対派の我々であるが、正しい、と考えざるを得ない」と述べ、「皮肉なこと」だと、感想をもらしている。これに対して、参加者の大部分——「革命派の老人たち」——は普選を求める街頭デモの提案を断固として撥ね付けてきた。ミヘルスは「奇妙な光景だ」と評している。そして、彼らの「古い伝統的」革命観は所詮、「怠惰な革命」しか意味しない、と断じている。それは「所与の状況下で行動がく自動的に>成長するという理論」である。「あたかも、人間自身が状況の真実のアクターではないかのように。」こうして、ミヘルスは非常に主意主義的解釈を明瞭に主張する。

「はっきり言う必要がある。この同志たちは我々に、革命的社会主義のもっとも嘆かわしい戯画を見せつけている。党の隠れみものとして役立たせている似非マルクス主義の背後に、非常に有害な精神状態が隠れている。即ち、党内の実状に対するおめでたい満足感、一切の事柄に関する不動の満足、時に反動的になる慣性の力、あらゆる新しい観念に対する明瞭な敵意、「外国」の同志、そして自分のものではないあらゆるものに対するドイツ的尊大、そして仏教徒的考え方、つまり「大いなる日」を待つだけの態度である。

この問題でミヘルスは、「労働の代表」と（ベルンシュタインを除く）修正派に対抗して、極左と極右との連携の可能性すら示唆している。勿論ここでもミヘルスの見通しは非現実的であった。しかし、「無気力無能力の改良主義者と不毛な古い革命主義者に抗して、もっと実践的な革命的行動の現実主義的な考え方が強まってくる」という希望は表明していた。

すくなくとも、プロイセンにとっては、「民主的環境が革命的階級の一切の活動にもっとも好都合である」という命題は枢要の位置を占めていることは間違い無いようにミヘルスには思えた。

ここで、民主主義と社会主義が結合する。そして、反君主制、反軍国

主義はドイツの民主化に最も必要な戦略となろう、というのがミヘルスの確信となる。⁽⁴⁾

2) ミヘルスとイタリア・サンディカリズム

ピーノ・フェッラーリスのミヘルス研究の特色は、ミヘルスの思想形成にイタリアの政治と社会、思想と文化とが強く影響したことを浮き彫りにした点である。従ってその点を無視ないし軽視した研究は容赦なく批判されることになる。とりわけレーリッヒに対する批判は苛烈なもので、ほとんど痛罵に等しい。(後述)

フェッラーリスはこの年ミヘルスが対決せざるを得なかった問題として次の三つあげている。⁽⁵⁾

① まず、イタリア社会主義の革命派、ブレシャ同盟の危機である。

ブレシャ同盟とは、前年の2月ロンバルディア州のブレシアで開かれたPSI支部大会でラブリオーラが提案した急進的な動議を軸に結成された革命派のことである。この動議は、カウツキーが裏書きして、かつ若干の修正を加えて(「カウツキー化されて」)、PSIボローニャ大会に提出された。ミヘルスはこの同盟とカウツキーの結合でイタリア社会主義者が活性化すると考えていた。ところが、この同盟が危うくなってきた。1904年のゼネストとロシア革命、そしてソレル主義の影響が強まるに連れて、ラブリオーラがフランス・サンディカリズムへの傾斜を強めたからである。⁽⁶⁾

このため、革命派の分裂の阻止がミヘルスにとって、緊急の課題となる。

② 第二のモロッコ事件は、プロイセン的「王朝国家」を嫌悪するコスモポリタンのミヘルスの神経を逆なでするようなものであり、ナショナリズムと軍国主義を相手にするミヘルスの格闘が始まることになる。ここで、反軍国主義と反国家主義という点で、フランス・サンディカリズムがからんでくる。

- ③ 第三のロシア革命と大衆ストライキ、党と労組の関係の問題。ミヘルスは、前者については、カウツキーやローザほど強い関心は抱かなかつた。後者は、革命的サンディカリズムの中心的問題を形成する。

さて先にも触れたように、ミヘルスの社会主義思想の発展にとってイタリアとの関わりは決定的であるといっても過言ではない。(『政党社会学』の実証的資料でSPDとならんでPSIが重要な位置を占めていることは周知のことである。)しかし、これまでのミヘルス研究では、そのことはあまり重視されてこなかつたし、それどころか、ほとんど無視されてきたといえるほどである。⁽⁷⁾ドイツ人の研究者レーリッヒは例外的にこの点に注意をよせているが、結果としては、誤ったミヘルス像がでっち上げられてしまった。

レーリッヒは、イタリア・サンディカリズムをむしろ穏健な性格のもの⁽⁸⁾とみなしている。ラブリオーラは選挙社会主義を明瞭には否定しなかつた。その点にはミヘルス自身も触れている。ラブリオーラ自身も選挙に参加していた。フランスのサンディカリスト、ラガルデルのように、選挙を「不毛な不可能事」とは見えていなかった。ミヘルスは、イタリアのサンディカリズムが、その本来の目的からますます離れていったと、確信せざるを得なかつたというわけである。レーリッヒによれば、同じようにムッソリーニもその「革命的理想主義」から、ラブリオーラとレオーネを批判していた。従って、「イタリアのサンディカリズムの方向はムッソリーニとミヘルスが同じように追求した革命的酵素を失ってしまった。」こうして、レーリッヒはムッソリーニとミヘルスの「極左的」立場での遭遇を捏造し、将来の極右的立場での融合の「前触れ」と決め付ける。フェッラーリスはこれをまったくの誤解と断ずる。⁽⁹⁾

この年からミヘルスはローマのサンディカリスト、エンリーコ・レオーネが発刊した雑誌 *Il Divenire Sociale* にも寄稿し始めている。この雑誌はラブリオーラの *Avanguardia Socialista* (ミラノ) とともにジョル

ジュ・ソレルの論文を多く掲載していた。

1905年1月、ミヘルスは *Avanguardia Socialista* 誌に「カール・カウツキー」(N. 130) を発表した。その隠れた意図は、「イタリアの革命派の足場としてのカウツキー」を提供することにあった、とフェッラーリスは分析している。言うまでもなく、その社会主義とマルクス主義解釈において二人(ラブリオーラとカウツキー)はほぼ対局に位置していたといえよう。権威ある正統的マルクス主義の使徒とその「解体者」ソレルの弟子として。にも拘わらず、両者ともこの時期非常に革命的であった。

さて本稿は先ず社会主義知識人論で始まる。自分の階級から「理論家と科学者」を輩出できないプロレタリアートにとって、ブルジョア出身の社会主義理論家・科学者は不可欠である。「プロレタリアの心臓と鼓動を共有する」理論家は「党のブルジョア化を招く一切の妥協を」拒否する。彼らは、いわば、「背後の橋を叩き壊したのだ。」これはミヘルス自身の境涯と重ねてしばしば使われる表現である。そのような「社会主義的ブルジョア」がカウツキーなのだ。マルクスの「真正な使徒で随行者」。いわゆる俗流化したエピゴーネンとしてのカウツキー像ほど誤ったものはない。むしろ、「独創的な思想家」としてマルクスの理論を発展させたことを自負してもよい、とミヘルスは賞賛し弁護する。

カウツキーは議会主義を批判する。しかし、ミヘルスによれば、自分と同じ革命派に属する議会フラクションの日和見主義には生ぬるい。社会主義者を「人民の奉仕者から人民の旦那にかえてしまう」(カウツキーの言葉だが記憶に値する。cf. N. 163) この議会主義の危機は議会フラクションを、党へと「組織されたプロレタリアートの規律」に従わせることで解決できる、というのがミヘルスの見解である。これは、来るべきSPDイエナ大会でも発言された。

同じ1月、今度は *Il Divenire Sociale* に「社会主義戦術の要因としての暴力と合法主義」⁽¹⁰⁾ を書いた。フェッラーリスによると、これにも隠れた意図があった。即ち、サンディカリストとしてのラブリオーラ批判で

ある。

イタリア・サンディカリズムとミヘルスとの対立点としては以下の4点で整理しておこう。(1)暴力問題、(2)ゼネストの位置づけ問題、(3)労組と党の関係の問題、(4)1905年11月の *Il Divenire Sociale* 誌上での論争である。

(1) 「暴力と合法主義」論文でミヘルスが言わんとしたのは、「暴力の病」と「合法主義の病」の双方の誤りであった。

社会主義社会は本来暴力を認めない社会である。また当事者を「野蛮」にするので、手段としての暴力も否定される。

反対に、合法主義は議会主義の「乾いた果実」であり、「支配階級の手にある玩具」でしかない。合法主義の対象である「現行法とは、我々の全く預かり知らぬ取り決めである。」従って、「社会主義者は必然的に反合法主義に立たざるを得ない。」中間の道——政府が法を破った場合のみ、社会主義者の暴力行使が正当化しえる——は意味が無い。ブルジョアジーと体制による日常的「暴力」をどう考えるのか。

この二律背反を乗り越えるためにミヘルスは思考を一段進めて、「歴史的な概念としての暴力」を使って議論する。

ミヘルスによれば、ラブリオーラは暴力を「聖母マリア」のごとくに信じている。が、ミヘルスは暴力をスローガンとすることは、道徳的にも誤りとする。しかし、「状態としての暴力の変化」という説は、暴力は「歴史の偶然要因」であり、「歴史の産婆」であるというマルクスの命題を引継ぎ、ミヘルスは「政治制度の廃止は我々の最終勝利にとって不可欠の条件である」として、君主制と第一院という「過去の力」の廃止を要求した。

(2) 第二の論点については興味深い文章がある。(「ストライキの正当性とマルクス主義」, N. 159)

社会主義運動に暴力的方法は認められるかいなか、という問いが、それ自体としては、形而上学のおしゃべりであると同様に、<正しいスト

ライキ>と<正しくないストライキ>についてのおしゃべりも無益だとミヘルスは断言する。

端的に言って、非人間的賃金奴隷状況を廃止する運動として、「ストライキはその形態が犯罪の分野に属するとしても、道徳的な範囲にとどまる。」ゼネストが正しいか否かは、それが民主的成果を達成できるか否かによる。その意味で、イタリアで普選のためにゼネストをうつことは正当であるとミヘルスは主張する。イタリアの議会の権限はドイツと比べてはるかに大きいからである。

(3) 繰り返しになるが、ソレルの著作はイタリアの若い社会主義者によってすぐさま吸収され、かれの名は「祖国フランスでよりもイタリアで大きく轟き、皆に知れ渡った」と後に『イタリア社会主義の批判的歴史』⁽¹¹⁾でミヘルスは書いている。彼はそこで、フランス・サンディカリズムがイタリア社会主義革命論にもたらした四つの契機をあげている。

- 1) 「社会党の社会的構成の不純という観念、よって、社会主義運動を整頓し直す必要性」、
- 2) 「社会主義経済に対して労組が機能しうるという理論」、
- 3) 「暴力が必要になる場合もあるということ」、
- 4) 「大衆の教育手段としてのゼネストへの信頼」、

である。中心には、社会主義の政治的・経済的・社会的主体としての労働組合という思想があることは言うまでもない。

しかし、ミヘルスは社会主義が労組にすっかり包含されているという考えは拒否している。また、ドイツについては、そのための「歴史的条件」が全く欠けているとした。ドイツについては、労組ではなく党SPDの方が「はるかに社会主義的で、唯一革命を志向している」からである。この点では終始一貫していた。

「権力奪取」論文(N. 149)はミヘルスの見方を簡潔に表明している。社会主義は「人間の意思と生命の尊厳と不可侵性——フランス革命の原理とミヘルスは呼ぶ——を信奉する。」戦争と暴力行使を嫌悪する。フラ

ンス革命の民主主義が実現されていれば、革命的方法は不要になる。しかし、一階級が自己の「特権」を自主的に、また、道義に促されて放棄するということは、「人類史上皆無である。理性ではなく、暴力がそれを消滅させる。」議会、労組、消費組合で「権力奪取」しようとするのは、ユートピアである。ここで彼は権力奪取の「基本的手段」として「革命的精神」を対置する。即ち、「人間の人間による搾取によって生じた階級社会の否定という歴史的使命を常に自覚した精神」で、それを国際的に目覚めさせる必要がある。具体的には、ロシア流の「秘密組織」から大衆ストライキまで多様でありうることをミヘルスは認めている。従って、「我々の目標への方法は必然的に革命的である必要もないし、原則的に合法的であることもできない。」状況による。ultima ratio regis (君主の最終手段) が ultima ratio plebis (民衆の最終手段) を生み出し、正当化することはロシアの例が鮮明に示しているとも述べている。(数少ないロシア革命への言及である)

(4) ミヘルスは1905年11月ごろ、Il Divenire Sociale 誌上でレオーネと論争している。ゼネストとロシア革命はイタリアの社会主義者にも刺激を与え、レオーネは「新しい理想と原理の綱領」が必要になったと、思想的再検討を主張したのに対し、この「歴史的」大事件に、ミヘルスはさほど感応したようには見えなかった。頑固に社会主義が労組ではなく、党にこそ宿るとする見解を繰り返していた。

が、実際問題としてフェッリとラブリオーラとの同盟は決裂しつつあり、ブレシア動議も反故になりつつあった。

フェッラーリスはこの時期のブレシア動議とカウツキーに対するミヘルスの執着の理由をこう説明している。

つまり、イタリアのように「社会主義理論と党の日常活動とが出会うこと無しに並行して進んできた国では」それらが統合されるためには、カウツキーとイタリアの<革命派>との合流が必要であると信じていたからである。⁽¹²⁾

二つ目に、ミヘルスは国際的な次元での反改良主義闘争のためにも、全革命派の結集を呼びかける必要を感じた。ミヘルスの言葉を使うと、「我々マルク主義者、革命家、サンディカリスト、階級闘争主義者は……孤立してきた……無力だった。なるほど、ラブリオーラ、ラガルデル、ラフォン、バルト、リープクネヒト、小生、そして全左翼の思想は同じではない、……しかし、我々に共通の巨大な革命的源泉」が存在する、と主張していた。(N. 163)

ちなみに、この論文でミヘルスはサンディカリズムをこう定義している。「社会主義戦術を、公然たる社会主義信条、直接行動、大衆の圧力によって、議会主義というブルジョアジーの空間から、経済的でプロレタリア的な空間へと転換する一般的傾向。」いうまでもないが、中心的アクターは党ではなく労組であることが含意されていることを忘れるべきではない。

P S I では1904年の4月ボローニャ大会から1906年10月のローマ大会までの間に、革命派が明確なかたちをとりはじめ、<革命的サンディカリスト>と呼ばれるようになっていた。結局、1906年7月にはP S I から分離独立した。

このイタリアのサンディカリスト・グループには、フランス・サンディカリスト・サイドからラフォンを通じた支援がよせられた。そのラフォンは、同じく外部から参画していたミヘルスを批判した。S P D の伝統的社会主義を離れよ、と求めた。そして、「社会主義は全く労組に存する」と、いうラブリオーラの命題を繰り返して強調した。

翌年1906年2月 *Il Divenire Sociale* 誌に掲載されたミヘルスの論文はこのラフォンに反論するためであったが、1905年のミヘルスのスタンスを簡潔に伝えてくれている。⁽¹³⁾

ラフォンの批判は、カウツキーとその党はもはや古い、これに労組が取って替わるべきだという主張に尽きる。「党は人工的、イデオロギー的な作り物」でしかないからだ、という。ミヘルスは、党が人工的な作り

物であることには同意するが、全く別の意味であると付け加える。

党は多くの労働者と青年、そしてとりわけ「勇敢で熱狂的な」社会主義インテリの努力のたま物である。このインテリたちは、自分の「理想主義と血と命」をこの人工物＝党に捧げた。ところで、ブルジョア出身のインテリは党をブルジョワ化しないだろうか。青年ミヘルス自身の人生にも拘わるこの問題に、彼はこう答える。

ラフォンは、党はまたイデオロギー的の作り物と非難するが、「そもそも社会主義自体がイデオロギーである」と反論する。これは記憶に値する命題であろう。

組合ですら、(理念的には) その紐帯として、社会主義の「理念」を有する。紐帯としてのみならず、解放という使命としても、この社会主義イデオロギーという「同一の絆」が決定的である。「人を社会主義者にするのは、プロレタリアに生まれついたことではなく、自らの頭脳に明確な思想を持つことだからである。」

党の社会主義インテリにとって第一の使命は、従って、「プロレタリア階級に自らの傾向を自覚させること」となるが、「革命的精神」の啓蒙であろう。従って、ブルジョア出身のインテリは党をブルジョア化するどころか、社会主義イデオロギーの保持には必須なのだ、というのがミヘルスの持論となる。

ミヘルスはここで、社会主義運動を墮落させる難問として、三つのディレンマをあげている。＜改良主義＞と＜革命主義＞、＜サンディカリズム＞と＜党＞そして「教義と戦術」即ち＜理論＞と＜実践＞の矛盾である。中でも、最後の矛盾が決定的だとする。

ここでも、批判的なのはSPDである。軍国主義に対するベーベルの姿勢、国家観でのラサールが狙上にのせられる。理論と実践の矛盾の根は、日常政治の日和見主義と議会主義にある、とするのがミヘルスの見解である。より深い根源は、「零を無数に付け加えることで多数派を結成」という信念、既存の「官僚制組織と軍隊」の容認のもとで、社会主義

社会を建設できるとする「愚かな信念」にある。党内で有力な議会主義を乗り越える意図がブレシャ動議に含まれており、それは未だ社会主義復活の基礎として有効だ。

では、今この党と労組を復活、活性化できるのは何か。ミヘルスはバリの労働取引所 *bourse du travail* をモデルにした労組を考えていたようである。「より純粹で、真性の労働者組織」であり、「革命思想が成長できる器」であり、「生産システム」を自ら生み出すことができるからである。

「労働組合は党の必須の補完物であり、その逆も又真なのである。……政治的で革命的な労組が生まれれば、党もそれに従うであろう。」このミヘルスの論説を載せた *Il Divenire Sociale* 誌の編集長(レオーネ)はこれに批判的な注釈をつけている。のちにラブリオーラとともに、離党してサンディカリスト・グループを結成するレオーネのミヘルス批判は興味をそそる。

ここでのミヘルス意図は、「伝統的社会主義の原則とサンディカリズムの原則の合致」、カウツキーないしブレシャ動議とソレル＝ラブリオーラを統合することにある、とレオーネは適切にも指摘している。しかし、ブレシャ動議は限定されており、サンディカリズムの思想にはそぐわない。注釈者は労組こそ、社会主義運動の「最も決定的で活動的な部分だ」として、党はその補完物でしかないと断定する。さらに進んで、党の労組への吸収すら挑発的に主張している。大事なことは、「二つの魂の二元論」を撤廃することだ、と。ミヘルスのいう社会主義イデオロギーは、労働者の利益意識で十分だ。ミヘルスの主張のことごとくに真っ向から対立する注釈であった。

フェッラーリスはこの時期のミヘルスに繰り返し現れるテーマとして、党と科学的理論の重要性を指摘し、それがミヘルスをカウツキー寄りにし、ソレルと距離をおくようにした、と説明している。

これに関連して、この時期のミヘルスにおける「実証主義的靈感によ

るマルクス主義」を指摘している。それは、常備軍と国家の歴史と経験的事実に即した「科学的分析と歴史的経験」の強調にみてとれよう。フェッラーリスによると、それが青年ミヘルスが「主意主義、自発性、直観主義、〈神話〉」に接近するのを防いだ。

レオーネは翌年、ラブリオーラらと共にP S Iを離れ、サンディカリスト・グループを独立させる。1907年にミヘルスは、IIインター大会(シエツトゥットゥガルト)に、このグループの代表として参加する。しかし、その数ヶ月後にミヘルス自身はP S Iから離れた。

そこまでを鳥瞰した後、フェッラーリスと共にこう判定できよう。青年ミヘルスのイタリア革命派との関係は「出会いから、論争そして別離へ」と進んだ。⁽¹⁴⁾

3) S P Dとミヘルス

1905年は、1月ドイツ・ルールでの大ゼネストと、ロシア(ペテルスブルク)での「血の日曜日」、3月モロッコ事件、とまさに「ヨーロッパの革命状況」(カウツキー)と呼ばしめた、緊張の1年であった。また、5月のケルン労組大会と9月のS P Dイエナ大会の間、S P Dでは政治的大衆ゼネスト、そして党と労組の関係について大論争が展開されていた。党としてのS P Dは事態をより適確に把握できず、軽んじていた。

(そのショッキングな事例がモロッコ事件に対する党の対応であった。)

フェッラーリスは、この歴史的な1905年の思想状況を以下のように分析している。戦争か革命か? この年はロシア革命の年であるだけではない。未来を予示する矛盾が明らかになってきていた。大衆状況の噴出とリーダーシップの必要性、社会愛国主義とアナキズム。「ダーウィン主義的唯物論と新理想主義、科学主義と反合理主義、マルクス主義の危機と新しいマルクス主義の復興、進歩への信念とデカダンス感覚」、これらのせめぎあいを通して、ヨーロッパ文化が徐々に試運転を行い、移行していく時代であった。

この年のミヘルスの政治的ヴィジョンは、「大衆とその運動に対する悲観主義的な低評価」、それに対応する、「指導、構造、制度への関心」の強化とフェッラーリスは特徴づけている。⁽¹⁵⁾それは2-4月の労働運動とルール・ストの論文にすでに読みとれる。

イタリアのマントヴァの社会主義系雑誌に書かれた「メーデーの思想」(N. 140)は、今だ楽観的な啓蒙的文章である。メーデーの意義をミヘルスは簡潔に三つにまとめている。

- 1) 反資本主義、反教権的だが、「平等」を軸に、個人主義的ではなく、連帯を象徴する日である。メーデーは、さらに、プロレタリアートの「直接行動の萌芽」を含む。「代理人や代表」無しに自分たちの「力の強さ」を示す。また、ブルジョアジーに対して、「プロレタリアートは経済的・社会的に絶対必要であることを」知らしめる。
- 2) 「社会主義運動の国際主義」。これは資本の国際主義に対抗する政治的必然である。「日本」を含めていたところで搾取がある限り国際連帯は「歴史的必然」となる。よって、
- 3) 反軍国主義。軍国主義は、「科学の否定」と断定される。というのも、科学は一国社会主義が不可能であることを証明しているからであるとされる。ミヘルスは「科学と文明の促進発展」にまだ期待を寄せていることが分かる。

この文章にさきだつこと2ヵ月前、Leipziger Volksstimme誌(2月18日)に「労働運動の時代」(N. 135)を書いた。ここでのミヘルスは理想と現実のあいだで引き裂かれている。

労組は政党とは別の課題を有す。党は「議会主義という袋小路」内で消耗する。労組は議会の「外部」から戦う、そして党を活性化できる、という命題が繰り返される。労働運動は「革命的酵素」であり、従って、「革命的感受性を有する労組は党にとっていつも若返りの泉となる。」(ここには、サンディカリズムの影響が共鳴している。)ミヘルスはあるべき労働運動と労組をこう規定したうえで、ドイツの労組はこの要求を

充たしていないときぱりと否定する。わずかでも「前進させる圧力」すら持っていない。労組幹部は、党の「右翼」に位置する。メーデーでもゼネストでも、些末な理由で消極的になる。従って、ドイツの労組は党にとっては「深刻な危険性」を意味する。革命を示すものなら、その思想ですら、資本との「平和条約」に縛られているという理由で否定されるありさま。「哀れな事」と揶揄される。本来この記事は労働運動の限界を主張した Düwell に対する反論を意図して書いたものだが、労働運動の死滅を喧伝するような結論である。悲観的事実認識が深まる。

ドイツの労働運動と組合については、フランス・サンディカリズムの機関誌 *Le Mouvement Socialiste* に多く発表されている。中でも3月末に発表された論文「ドイツのストライキ——ルールの坑夫たちのゼネスト」(N. 137) は重要である。

1月7日、幹部の「気弱な勧告」にも拘わらず28万人の坑夫がストライキを決行した。1889年以来という。ここで、幹部の臆病さの原因である、「永年に渡る<労働者の官僚主義>」がはっきり示された。しかし、このストは「ラヴェルの裏側」をも見せつけたとされる。つまり、参加者の多様性である。社会主義者のみならず、カソリックとりベラルの労働者をも引きずり込んでいたからである。カソリックの司祭はこのストを支持した。

議会では、炭坑の国有化が提案された。ミヘルスはこれを「SPDにおけるマルクス主義精神の欠如」と非難する。国家＝「中立的存在」幻想にかぶれた議論である、と。国家は、資本家による「人民支配の道具」に他ならない。しかも、封建的なドイツ国家は強大。ドイツでは「国家ほど専制的な旦那はいない。」従って、国有化は「大企業を官僚化、封建化すること」であり、「半分兵舎、半分徒刑場の巨大な制度」を立てることに他ならない。ミヘルスの反国家主義をはっきり示している。

運動は盛り上がり、最終的にはプロイセン議会での普選を要求するスローガンを掲げるに至った。

突然執行部はしり込みする。「国の経済」を脅かす、とプロレタリアートを「侮辱」するような文句で、「オリガーキー的命令」を出したのである。執行部批判の声が強まる。「しかし、ドイツの労働者は未だ、執行部無しにやっていく」ことはできなかった。

このストは教訓としてつぎのことを証明した。戦術の欠如と「運動に内在する心理的ファクター」を無視したこと。ゼネストは国内・国際の、また職種を超えた連帯があって初めて文字どおりゼネストと言いうる。ドイツのプロレタリア大衆は資本家を真に脅かすことを恐れ、リーダーは「法律」を侵すことを怖れた。「合法性と愛国心」を称えるストライキは勝利しない。

ミヘルスの出した総括はこうである。「大衆は幹部たちの議会主義、中立性、合法性の戦術が失敗したことを、身を持って確認したのだが、彼らは幹部を放り出すことも、彼らの間違った戦術を正しい戦術で取り替えることもまだできない。」

この論文に対してはドイツの労組幹部より反批判がなされた。ミヘルスは同じ Le Mouvement Socialiste で6月それに反論を書いた。そこで初めて短いながら、オリガーキーと組織内民主主義に関して自己の見解を表明した。つまり、失敗に関して同じ審判を下したパンネケークの証言として、失敗は<幹部>の怠慢と弱さのみならず、「官僚主義とオリガーキーの最悪の精神」のせいである、と。また、民主主義については、「選ばれた者の党への従属、<幹部>の専門化の否定」に言及していたのである。

さて5月イエナ労組大会に関する報告はオリガーキーの初めての分析がなされたものとして重要である。(N. 158) ここでミヘルスは、労働運動を見る二つの視点をあげている。

- 1) 先ずは、何よりも革命運動に対する革命的サンディカリズムの立場を紹介する。「社会革命の道具でありその拠点」である労組は、合法主義化しやすい党をも活性化する。そしてこの見事な見本を提供

するのが、フランスとイタリアのサンディカリズムであると高く評価している。

- 2) 第二の見方は、イギリスのトレードユニオン主義とドイツの中立主義という先に述べた立場である。現状のブルジョア経済を前提とする改良主義戦術に終始する。従って「階級闘争」の精神を失ってしまった。規模と財政という「外的威容」に自己満足している。党のラディカルなメンバーは、保守化し修正主義寄りになった労組の危険性を指摘し始めたという。

カウツキーはその危険性を、組合幹部への修正主義イデオロギーの影響と考えたが、ミヘルスは、より「客観的な構造とメカニズム」に焦点を当てて分析し始めた。

労組を支配しているのは「安寧の要請」である。少しでも組織を危うくする運動は極力回避される。それどころか、「愚かしいほど」怖れを抱く。メーデーがその例で、それは「プロレタリアートにとっては有害だ」と大会では否決された。ところで、ルールでも示されたように、一般組合員と幹部との間に意識性の乖離が存在し、そのため、「少数の〈幹部〉の官僚主義が、組織された多数派の自発的運動をことごとく粉砕する。幹部はなるほど更迭しうるが、実際は一度も更迭されたことがない。」

ついで、巨大化した「財政」それ自体が、その喪失への恐怖を生む。幹部は「責任感をグロテスクなほどに拡大解釈する。」こうしてドイツの労組は「あらゆる行動力、エネルギーそして男らしさ」を失ってしまった、と断罪される。革命的行動から組織の温存へという目的の転換がなされてしまった。

ミヘルスを有名にした政党組織の「オリガーキーの鉄則」は、実はこの巨大化したドイツの労組の分析から得られたもので、それが党へと拡大適用されたことになる。⁽¹⁶⁾

ただし、この段階ではドイツの労組のみが対象になっていることに注意する必要がある。

先ず、先にみたように、ミヘルスは社会主義革命の希望を党に寄せている。よって、現代は「労組と党の間の公然たる戦いの時代」なのだ。ただ、幹部は重複している。よって「事態は明瞭ではない。」

第二に、フランスのサンディカリズムとイタリアの労組とも対照される。仏伊では、「階級的凶々しさが強まるにつれて革命化」するのに対して、「ドイツでは逆」で、試練を経た抵抗が労組の官僚主義装置を戦闘に不向きにし、疲れさせ、不能にした。

ドイツの労組に関する限り、革命的サンディカリズムの展望は望めない。そして巨大組織の生理であるなら、オリガーキーが仏伊の労組にも、その大規模化とともに現象化するはずである。これがミヘルスが次に対決せねばならないテーマである。

ドイツ労組に対してと同様、党としてのSPDの悲観的分析もそのイェナ大会についてなされる。

10月に書かれたイェナ大会の総括文(N. 157)でミヘルスは、巨大政党の衰弱という「歴史法則」の解明に向かう。静態的で保守的で鈍重な、「錆びた重い機械」となった大政党である。

イェナ大会でSPDはケルン労組大会での反ゼネスト決議に対応を迫られた。ベーベルのゼネスト動議は極めて守勢で消極的なものであった。だからこそ採択されたとも言える。

ミヘルスのSPD批判は、大量の票を獲得しておきながら、モロッコ危機に際して全く「眠って」しまった巨大な官僚組織としての党に向けられた。カウツキーは独仏戦争の危険性を認めてはいたものの、それに反対するのに「社会主義大衆」はあまりに弱すぎると観念していた。彼は、「宿命論」に陥ったとミヘルスは批判する。ここでミヘルスは、「祖国愛と革命主義」についていくつかの論文を書くつもりであると記している。又自分の国際主義が、単なる言葉だけのディレッタントイズムではないとも断っている。

ベーベルの堂々たる「祖国愛」肯定は有名だが、ミヘルスによるとSPDの面々はナショナリストでもインターナショナリストでもない。言い換えれば、自国のブルジョアには敵対するが他国のプロレタリアートの友というわけではない。しかもそれは、SPDのみならずどの国にも共通の「性格特徴」であるという。マルクス主義と文化の欠如が理由とされる。社会主義者の紐帯はイデオロギーにあるとするミヘルスの基本認識から導きだされた分析といえる。この点ではむしろ、ミヘルスの主知主義を指摘することができるかも知れない。

ともあれドイツの不自由な現状に対してSPDは「余りに」楽観的である。ドイツの社会主義者の「心理」とドイツ人の「官僚主義精神」の「根本的変革」がなされない限り、何も期待できない。

党の保守化は議会フラクションで顕著とみたミヘルスは、その党への従属を要求していた。この点でミヘルスはベーベルとツェトキンとは同意見であったという。第二の組織問題は、国会議員の大会出席の資格に関していた。フランス、イタリア、オランダでは国会議員の資格のみで自動的に参加できることは認められていなかった。それが将来的に危険になるのは、議員の特権的資格が議会主義を一層強めるからである。確かにドイツに「本来的な議会」は存在しない。しかし、議会主義化は始まっている。議員の特権的資格がその証拠である。ミヘルスの同時代認識は悲観的である。ラサールの時代に比べると「自由の時代」と言えるが、その自由と民主主義は「形式」だけでしかない。「大衆の心理」は今だ「権威主義を払拭できていない。」ベーベルの「言葉だけの革命主義」は、結局、「真のマルクス主義的な革命精神」の発展を阻害するだろう。⁽¹⁷⁾

モロッコ事件とSPDの「眠った」対応に衝撃を受けたミヘルスは、イェナ大会で、ゼネストや党・労組関係問題、ロシア革命の影響についてではなく、モロッコ危機について発言した。⁽¹⁸⁾ベーベルの素朴で無批判的な「社会愛国主義」を揶揄することで、反軍国主義は反ベーベルへと

結晶化していった。⁽¹⁹⁾(ナショナリズム問題については、後述。)

さて、1905年末のミヘルスの「理論的、政治的到達点」を見極めるためには、翌年発表された「ドイツ、社会主義、労組」(N.180)が有益であろう。これは、2月にパリ社会科学自由大学でなされた講演がもとになっている。

ミヘルスはここでドイツの歴史的状況を体系的に分析している。

まずミヘルスは社会主義の2契機をあげる。それらは時に、アンチノミーを呈することもある、という。理念と階級運動の二次元である。これは、この時期のミヘルスの社会主義分析ではなじみの手法である。前者の面では社会主義インテリの、後者については経済発展と工業プロレタリアートの存在が重要となる。

結論を先取りするというなら、この二点でドイツは最も好都合の条件の下にある。理念としての社会主義はドイツで生まれ、当地では、空想から科学へと発展している。ドイツに比べると英仏では、理念としての社会主義は生まれたばかりの段階にある。(フランス・サンディカルズムを社会主義理念とは見做していないということか。カウツキーこそ理論的代表なのであろう。)

運動としては巨大な規模に達している。よって、「科学的」にこう要約できる。ドイツの社会主義にはアンチノミーが見出される。モロッコ事件を機に「ドイツの近代的で民主的な勢力、労働者と平和主義者の無力さがフランス人の目に、痛ましいほど明らかされた。」世界中がSPDの声を待っていた。「このドイツ社会主義の明白な無力さはどこからくるか。」これが本稿の主題である。

まず、SPDの歴史的「環境」が指摘される。ロシア反動の倒壊後はドイツが「反近代、反民主主義の大国」として首位の位置を占めることになった。「中世の過去」が今だ支配しており、「古いカースト」が政治・経済・社会でヘゲモニーを握っている。イギリスを凌ぐ勢いの工業化にも拘わらずドイツの歴史には「第三身分の登場」が見られない。議会は

未熟、皇帝とユンカーによる専制政治の飾り物でしかない。これを見れば、フランスに対する羨望を禁じ得ない、と率直に吐露している。

ついで、この法と憲政についての心理的側面の分析がなされるが、このアプローチが次第にミヘルスによる分析の重要な地位を占めるようになる。まず、堅固な「封建的派閥の存在」によるブルジョアジーの政治的断念があげられる。その結果「ドイツの世論というものがある全く存在しないのだ。」また、皇帝への「盲目的服従」を誓う「強力な機械」、即ち「中央集権化した官僚機構」が、反政府世論への「鉄の斧」として仕えている。そして、ドイツ人の性格、「受動性、規律遵守」と「諸階級の歴史」があげられる。強力な金融資本と革命の歴史を知らないプロレタリアート。

ドイツ社会主義の無力さの外的環境に続いて、内的状況の分析へと進む。これこそミヘルスの今後の研究課題で中心となるべき領域である。しかし、この報告では党よりも労組が主に組上にのせられる。

ミヘルスによるとドイツの労組は労働者に最大の「利益」を獲得することを目標としてきた。「未来の政治・経済体制」とは関わりを持たなかった。従って、必ずしも社会主義的である必要はない。「政治的中立」を標榜してきた。フランスの労組とは異なって、「政治をひどく嫌っているのだ。」(反)軍国主義、戦争と平和の問題でも消極的、よって、ルール・ストの場合のようにカトリック系組合とも共闘する。

組織の特徴としては全国的統合と中央集権化、強力な官僚制の存在が指摘される。ここから労組の社会的統合機能が導きだされる。何故なら、こういう労組は体制に安心感を与えるからである。ことに大学人は労組の中に、革命とSPDに対する対抗力を期待しているという観測は興味深い。

組織の規模という視点も大事である。即ち、いくつかの大組織が「階級闘争のおくれの原因」をなしているからである。そして最後に、例のオリガーキー命題が述べられる。巨大組織と財政、そして「労組官僚制」

はその宿命を免れ得ない。即ち「自己が依存し、存在を負っている財政と組織を失うことへの恐怖」が有力になるという宿命である。

さて党にかんする記述は少ない。構成員の出自からしてよりプロレタリア的といえるが、戦術では著しく議会主義的、よって、反軍国主義でも妥協的たらざるを得ない。(労組とくらべると党の方が、より社会主義的との評価がみられないことに注目すべきであろう。ミヘルスの党に対する期待が後退、減縮してきたことの微なのかも知れない。)

問題は党と労組の関係の議論である。ここでは人的重複と、別種の「理論的基盤」という矛盾が繰り返して強調される。

1905年ケルンの組合大会が決定的であった。というのも、メーデーとゼネストの二つのテーマで、組合が党の運動方針にも影響を及ぼそうとし始めたからである。

既述のように、メーデーについて大会は率直に財政的観点から参加を見合わせるよう勧告した。メーデーを「党の心の琴線」に触れる問題と考えていたSPDとは正反対の方針であった。ゼネストについても、それを議論することすら組合大会は禁じたのであった。党はゼネストについては組合とほぼ同じ立場にたっており、「壮大な無意味」と見做していた。しかし時代が変わった。近年の打つ続くゼネストは、失敗にみまわれつつも、展望を開く可能性を示しつつあった。ミヘルスによれば、「ある場合には、労働者の政治生活のためにそれを利用する必要性すら示唆していた。」よって、9月のイエナ大会では「究極の武器」としてゼネストを承認する決議が可決された。しかし、これも「言葉だけの革命主義」に終わった。むしろ、体制強化に寄与する結果になった。「ドイツ労働者の精神的な弱さと方向喪失は、遅れたドイツの国家体制を強めただけだった。」

結局は悲観的なものであった。ドイツ帝国の中世的構造と、モロッコ危機で明らかになった「民主勢力の弱さのため、階級闘争という社会現象は」無害なものになった。

しかし、ドイツのプロレタリアートは自己の経済的と政治的の力を自覚すれば、「新しい時代と進歩」をもたらすであろう。「それが彼らの歴史的使命である。」こうミヘルスは締めくくる。

このミヘルスの結論でもはっきりしていることは、マルクス主義が一種の教条的な「歴史哲学」(フェッラーリス)と化していることである。歴史と経験による事実分析は、マルクス主義の予定する歴史傾向に背いている。ミヘルスの方向は、後の「科学的分析」の蓄積が、前者の倫理的な理想主義的契機を押しつけて進んで行くように見える。ともあれ、イデオロギーとしての社会主義と経験的事実の科学的分析との整合性という難問をどう解決するか。もしくは、断念するのか。フェッラーリスは、こう要約する。実証主義的マルクス主義、科学と道德の関係、事実判断と価値判断の関係という未解決の問題に促されて、青年ミヘルスは、進歩主義への道德的信念に逆らっても、科学的な記録係に徹するという、新しい分裂へと入り込んでいった。

4) ナショナリズム

ミッツマンも言うように、ミヘルスは家系的にもコスモポリタンであり、また、ドイツ国内では「民族的少数派」に属していた⁽²⁰⁾。そのため、「ラインのインテリのホーヘンツォレルン家とユンカーのプロイセンに対する遺伝的な敵意」を受け継ぎ、帝国ドイツの軍国主義的遺産にますます鋭い批判的意識を強めていった。

それとの関連でミヘルスは、F.ナウマンの「帝国主義的社会君主制」の観念に執拗にこだわった。その「社会帝国」という構想は、「ドイツ帝国の血管の中」を動きまわるウイルスのようにドイツを苛んでいるようにミヘルスには思えたからである。ミヘルスはその構想を、ビスマルクとラサールの出会いによる人民の社会統合のメカニズムとして究明しようとした⁽²²⁾。

さて、ミヘルスはベルンシュタインの編集する雑誌 *Dokumente des*

Socialismus に、イタリア統一の英雄ガリバルディを紹介する文章を書いた。(N. 156)

その中で彼は、「ガリバルディは社会主義者であった」と断言している。もっとも、そのタイプはデ・アミーチスの様な、イタリアでは珍しくないタイプ、「予言者タイプの倫理的社會主義者」である。しかし、ガリバルディは、「祖国統一と社会共和国」という二つの目標に挟撃され、前者のために、後者を犠牲にした。社会主義とナショナリズムへのミヘルスの関心がここに投影している。

イエナSPD大会でもミヘルスは、「社会主義精神」を欠くSPDは、「SPDとしての我々の義務と国民としての我々の義務が衝突した場合」何をしてきたか、と糾弾した。⁽²³⁾

階級と民族と性はミヘルスの生涯の中心テーマである。

モロッコ危機はショーヴィニズムと戦争の危険性、それに抵抗する主体の問題を提起した。これまでミヘルスは、プロレタリアートにとっては国際主義とナショナリズムは矛盾しないという立場をとってきた。しかし、それは生の現実がむき出しに突出してくる事件を前に、抽象的であることが分かった。従ってナショナリズムの具体的考察に入っていくたとしても驚くに足りない。

その前に、啓蒙的で分かりやすい文章を見ておこう。抽象的理想論がまだ青年を捉えている様が伺えるからである。

「金持ちの祖国」(N. 161) は、有名な命題「プロレタリアートに祖国は無い」を啓蒙的に説いたものである。

祖国愛と祖国への献身を「当然」とするのは、人民自身ではなく、政府とブルジョア階級だけである。「祖国」は「貧しい階級」に何をしてくれたか、と挑発する。「実際には、労働者階級は現在の祖国に愛するに値するもの、守るに値するものすらあまり見出せない。」飢えた者に「愛国感情」など生まれるわけがない。プロレタリアートにとって、「真の祖国は自分の階級である。」彼らは「金持ちの祖国とは何の理念的共同体をも

有しない。」従って、政府とブルジョアジーにとっては、プロレタリアートに対する祖国愛「教育」が必要となる。対して、プロレタリアートは戦争に反対する「ゼネスト」を実行する。結局、平和のためにはプロレタリアートが頼りとなる。「労働者階級は現在のヨーロッパにおける平和の唯一の牙城である。プロレタリアートが望みさえすれば平和は保てる。」

この希望的観測にも拘わらずSPDとドイツ労働者は眠っている。

ナショナリズムの具体的考察としては、「祖国愛（パトリオティズム）の諸類型」（N. 131）がその第一であろう。

祖国とはなにか。先ずその概念規定から始める。というのも、「祖国」概念ほど、「混乱」が支配し、「利害」と「心理」が影響する概念は他に無いからである。

- 1) 誇大妄想型の祖国は、自民族のみが正しく、従って優越しているという迷妄に基づく。自国内の（言語、人種、文化の）少数派と他民族に対して、「尊大に情け容赦無く」発動されると危険なものになる。ショーヴィニズムとジンゴイズムである。
- 2) 擬似倫理的な型の祖国。攻撃的な祖国愛が、自己正当化のために理想主義や道徳化、倫理的動機づけを利用する。文化と思想、キリスト教の普及がその好例である。しかし、「高い文化は、それを有する民族に、他民族を抑圧し虐待する権利を与えはしない。」
- 3) 空想的な型の祖国愛。あらゆる犠牲を要求する形而上学的祖国愛、抽象的な祖国崇拜のことである。この場合、外交官と国家の区別がつかなくなる。
- 4) 利害関係の型。これが階級性と交差する側面であろう。資本の論理は国境を無視する。安い外国人労働者を購入することで、自国の労働者を「飢え死にさせる。」しかしこれに対して、プロレタリアートの国際主義が「絶対的で抽象的な国際主義」にとどまる限り不十分だ、という認識にミヘルスはたどり着いた。機械的な平等主義は、「実践的原則に拘わる民族問題」にはむしろ気がつかない、と。

ドイツに関しては、先ず何より現在の国家体制と祖国概念とを同一視することをミヘルスは「奇妙」だとして拒否する。そうでないと、反君主制もしくは共和主義は、「祖国」無き者とされるからである。王朝国家の利益と一体化する中世的階層が存在する限り、「真の祖国」は望めない。

- 5) 先祖帰りのな祖国概念。大衆の深層心理の隔世遺伝的で暴力的な発現とでも言えよう。(これが後に歴史哲学と結び付けられて、ショーヴィニズムの再定義に利用される。)

以上の本質規定を有する祖国(愛)は社会主義とは全く相容れない。抽象的国際主義にも、しかし、落とし穴がある。国際主義は、民族と祖国、その人間的多様性を、副次的で「偶然的」な産物として片づけてしまう。ミヘルスによると、その違い、多様性は「人種的、心理的、風土的状况そして歴史的条件」の結果であり、単なる「人類史のでこぼこ」ではない。彼は二つの、理論と実践での「誤り」を指摘する。

先ず、「文化的発展の要因としての民族」を非科学的として無視する誤り。(科学的には、人工的国際語が合理的であろう。)現実の被抑圧民族の「心からの願望」を真面目に考えない誤りである。

次いで、今度は積極的に「祖国愛と世界愛」の和解について論じる。

先ず、各「民族共同体」の独自性と多様性を前提に、その「文化的不可侵性」の保持と防衛こそ、「唯一の倫理的に正当化しうる形の祖国愛である」と主張する。ここから、以下の結論が導きだされる。「他民族による抑圧からの民族解放」が人類の文化的発展の条件であり、民族の統合と自由は祖国の自由と自由な人間性のために不可欠の条件となる。この祖国愛をミヘルスは「民主的ナショナリズム」ないし「倫理的ナショナリズム」と呼ぶ。これは、ミヘルスがゾンバルトの「文化的ナショナリズム」⁽²⁴⁾から借りてきたものとされるが、ミヘルス自身は、ラディスラウス・グンプロヴィチの名をあげている。⁽²⁵⁾

グンプロヴィチは、「民主的ナショナリズム」の意義は「人類の文化」

に参加することにあるとし、その特徴をこう述べる。その「独自の文化的タイプの価値と美」は、他民族との違いにではなく、「隣国民が自分と全く同じように自由で、また、独創的に振る舞うこと」を求めるところにある。よって、「ショーヴィニズムと抽象的な国際主義とは和解できない敵同士である。逆に民主的ナショナリズムは具体的な国際主義を求める。」

これが、ミヘルスの「真の祖国愛」の出発点である。

では、そのショーヴィニズムはどのように発生するのか。「発展と人種」論文(N. 155)はこの問題に、社会ダーウィン主義を借りて説明しようとしている。⁽²⁶⁾

いずれの時代もその終局面では、「偏見と不利益」を遺産として取り残す。それが「進歩」を邪魔する。フランス革命と恐怖政治によるそれへの恐怖がその例とされる。これが「歴史的遺産の法則」と名づけられる。民族闘争も遺産としてショーヴィニズム（「民族感情の過剰な高揚」、「墮落」）をもたらす。その本質は、「私は私」の「私は君以上の者」への狂気じみた転回であり、さらには、「私は君以上だから、君は私の様になり、私に服従せねばならない」へと転回されるところに存する。ミヘルスによると、この民族感情は「全世界の労働者階級」のみならず、一部の知識人までも捉えてしまった。

要するにショーヴィニズムは過渡期の偏見である。古臭い過去の「隔世遺伝」の爆発的現象というわけである。

モロッコ危機に対し果敢に挑戦したのは、SPDではミヘルス唯一人だったと言われる。⁽²⁷⁾

しかし、SPDは眠ったままであった。

帝国主義の時代に、「植民地の問題」(N. 154)は社会主義政策にとって、「迷路」を意味した。興味深いことに、この短い文章でミヘルスは「植民地の社会主義革命」の可能性について触れている。ただミヘルスはレーニンほどの構想力を持ち合わせてはいなかった。

6月には「SPDとモロッコ」(N.143)でこの問題を正面から論じ、ミヘルスは党とドイツの労働者に警鐘を鳴らした。民主主義の観点からも人倫の観点からも「我々は悲しい国家体制に住んでいる」と嘆いた。「モロッコでドイツの利益が脅かされている」とのキャンペーンに、資本家と植民地主義グループの利益でしかないと、反論を加えた。フランスとの戦争は「狂気の沙汰」であり、戦争の危機は外交によって内政問題(「祖国における苦境と悲惨」)から目を逸らす常套手段だ、と喝破した。そして、ドイツの労働者はフランスの労働者と共闘せよ、ヨーロッパの平和はSPDの肩にかかっている、と呼びかけた。「社会主義の意味での経済的革命は、少なくとも全世界のプロレタリアートによる同時的で一律に均された前進によってのみ実現しうる、これが私の確信だ」と語った。つまり植民地の解放はヨーロッパ自身の変革を伴わざるをえないのである。

この年の年末近く、ミヘルスは *Il Divenire Sociale* に「社会主義と植民地問題」を書いた。彼はここで、「私は現在この植民地問題に専念できる唯一の者だと信ずる」と自信をのぞかせて書き始めている。当時の一般的認識状況に鑑みればあながち不当でもなからう。(ホブソンの『帝国主義』が発表されたのは1902年であった。)

かれはこのテーマを、社会主義の視点から政治と経済の両面で簡潔にまとめている。後者を先に見ておくと、植民地は経済的にわりがあわない、との趣旨である。しかも、費用は結局人民のポケットから出る。国内の改良(福祉、開発、教育)にまわすべきだ。

興味深いのは、政治的側面の考察である。先ず、植民地政策は軍国主義を強化させ、行政官僚と軍を一層反動的にする。ドイツがその好例である。懸念されることは、植民した労働者の「小ブルジョア化」現象である。人種的優越意識と小地主の地位が、プロレタリアート出身者を「旦那」にしてしまう。自己の「階級意識」を失うという「悲しいが理解可能な事実」である。従ってミヘルスによると、植民地政策はプロレタリ

アートには百害あって一利無し、ということになる。

5) おわりにかえて

階級と民族と性の解放というトリアーデをつなぐ視点として、性の道徳観における階級的相違はミヘルスが繰り返し剔抉してきたところである。⁽²⁸⁾ 又、解放にとっては、先ず啓蒙啓発が必要なことは言うまでもない。ミヘルス自身、女性と性愛問題では啓蒙啓発者として自覚していた。後に触れる婦人参政権についても然りである。

性的存在としての女性問題は、ミヘルスにあってはおそらく、いわゆる<オールドミス>と売春において極まる、といえよう。これが階級によって異なって現れるというのがミヘルスの発見であろう。「プロレタリアートの<オールドミス>としての娼婦と売春」(N. 162)は、従来の自説を繰り返している。この問題の本質は「経済的性質」にあるが、社会的側面(性愛問題)の分析がミヘルスに独自のものである。

いわゆるオールドミスはブルジョアジーにしか見られない。なぜなら、プロレタリアートの独身女性は生活のため売春を余儀なくされることが多いからである。「一方に満たされない性愛、他方に商売としての過剰の性愛」、「現代の社会秩序の下では、おぞましい皮肉」と言わざるをえない。両者とも自由意志ではない。強いられた地位である。「資本主義体制が両性のプロレタリアートのみならず、ブルジョア女性のかかなりの部分ですらひどく抑圧している。」

ブルジョアジーの青年はプロレタリアート出身の娼婦が存在するがぎり、買春ときままな生活で満足するので、未婚晩婚が多い。(よって、女性のオールドミス化)

売春の最大の原因は貧困である。女性労働者の賃金が高いところでは売春が少ない。従って、プロレタリアートの若い女性は「飢えか恥か」の究極の選択をせまられることになる。これらの所見は、ミヘルスの持論である。

売春が存在する限り、「我々の誉むべき文明は、背後に汚辱と犯罪を隠している美しい書き割りではない。」ミヘルスはモラリストの売春弾劾の叫びに対して、これほど「愚かしく笑止千万なものはない」と一蹴する。「根本的な分析」を欠いている、無益なものではない、と。「全生活条件の進化」と「社会教育」が唯一の解決策とされる。

最後に、ミヘルスの議会観を示唆する興味深い資料によって、一言付け加えておこう。

ミヘルスはSPDの議会主義路線を痛烈に批判してきた。では、そもそも議会制をミヘルスはどう考えていたのか。制度としての議会そのものを否定したのだろうか。実はそうではない。社会主義への道として、議会を全否定しているわけではない。そもそも、ミヘルスは社会主義戦術に関しては、余り拘泥しなかった。「社会主義的目標」が決定的であり、その方法は多様でもよい、というのがミヘルス立場であった。⁽²⁹⁾

1905年ミラノの女性団体が婦人参政権についてのアンケートを行い、ミヘルスもそれに回答をよせている。⁽³⁰⁾

原則的に賛成であるだけではなく、導入が早ければ早いほどイタリアの発展に寄与するであろう、とはっきり肯定した。

先ず、権利という面から考えれば、「現代国家は男性と同じほどの義務を女性に課している。」兵役を除いてだが、そもそも文明国家にとって、「この野蛮な義務は無しですますことができる」はずと主張する。それどころか、女性は兵役よりも一層重大な役割、「出産と保育」を果たしている。その意味で、「女性は男性よりも偉大な社会的重要性を誇ってもよい」とフェミニストらしい見解をのべる。「この国民生活への参加という倫理的、社会的必要条件から人類の半分を排除できるような理由はそもそも存在しないように思える。」女性の政治的未成熟などの理由で反対する者にミヘルスは、こう一般的なかたちで厳しく批判する。「階級、人種、性」などの解放で未成熟を唱える者は、「徐々にでも人間の相関的範疇を

成熟させるためには全くなにもしない人間である。」ミヘルスの心情をよく表す文章でろう。また、階級と民族と性の解放を貫いている一本の赤い糸、共通認識とみることもできる。

最後の引用文は知識人における理論と実践の矛盾の問題、自己欺瞞という倫理的判断の問題で、ミヘルスの深い思想的拠点に関わっていた。ドイツのプロレタリアート、人民大衆への期待と幻滅が交錯してくるにつれて、ミヘルス自身の新たな拠点の再構築が必要になってこよう。

注

- (1) Albert S. Lindemann, "A History of European Socialism", 1983, p. 172ff.
- (2) 安世舟『ドイツ社会民主党史序説』お茶の水書房, 1990年, 154頁。
- (3) ミヘルスの著作からの引用は、本文や注でことわらない限り, "Opere di Roberto Michels" in *Studi in Memoria di Roberto Michels*, Annali della Facolta di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Serie V-vol/XV, R. Università degli Studi di Perugia. p. 39-76 にあるミヘルスの文献目録の番号で本文中に略記する。1905年分は本稿末尾に掲載してある。
- (4) Pino Ferraris, "Roberto Michels politico (1901-1907)" in *Quaderni dell' Istituto di studi economici e sociali*, [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino], 4/1985, p. 107.
- (5) *ibid.* p. 90.
- (6) アンリ・デュビエフ編著, 上村祥二・田中正人・谷川稔・藤本桂子訳『サンディカリズムの思想像』鹿砦社, 1978年, によれば, 「イタリアのサンディカリズムは労組よりも党と大学知識人の世界で強かった。」(48頁) また, 「ソレルの影響がこれほど大きな所は他にはない。」(258頁)
- (7) ビーサムとミッツマンの研究がそうである。D. Beetham, "From socialism to Fascis: The Relation Between Theory and Practice in the work of Robert Michels", in, *Political Studies*, No. 15, pp. 3-24, 161-181, 1977. A. Mitzman, *Democracy and Estrangement. Three Sociologists of Imperial Germany*, 1973,.
- (8) Rörich, W., *Robert Michels. Vom Sozialistisch-syndikalistischen zum faschistischen Credo*, 1972, S. 36-38.
- (9) Ferraris, *ibid.* p. 100.
- (10) R. Michels, *Violenza e legalitarismo come fattori della tattica socialista*,

- 《Il Divenire Sociale》16 gennaio 1905.
- (11) R. Michels, *Storia Critica del Movimento Socialista Italiano-dagli inizi fino al 1911*, Firenze, 1926, p. 323.
 - (12) Ferraris, *ibid.* p. 106. Cf. R. Michels, *Storia del Marxismo in Italia*, 1909, p. 130.
 - (13) (N. 169): Discorrendo di socialismo, di partito, e di sindacato. 《Il Divenire Sociale》anno II, N. 4, pagg. 55-57.
 - (14) Ferraris, *ibid.* p. 110
 - (15) Ferraris, *ibid.* p. 114.
 - (16) cf. Ferraris, *ibid.* p. 116.
 - (17) (同趣旨は大会でミヘルス自身が発言していた。Protokoll über die Verhandlung des Parteitags der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands zu Dresden 1905, Berlin 1905, Vorwärts, S. 184-5.)
 - (18) Protokoll, S. 216-7.
 - (19) cf. Ferraris, *ibid.* p. 119.
 - (20) 参照, 拙稿『青年ミヘルス研究』(1)1901年:ケルン——生い立ちと出発, 『神戸学院法学』第22巻第3・4号1992年11月。
 - (21) (N. 60) *I progressi del repubblicanesimo in Germania*. 《Rivista Popolare》di Lettere, e Scienze Sociali, anno IX, N. 15, pagg. 400-402.
 - (22) Ferraris, *ibid.* p. 126-8.
 - (23) Protokoll, S. 325.
 - (24) Ferraris, *ibid.* p. 129.
 - (25) 最近, このグンプロヴィチの影響が手紙によって, 論証された。Timm Genett, “Lettere di Ladislaus Gumpłowicz a Roberto Michels”, in *Annali della Fondazione Luigi Einaudi, Torino, Volume XXXI-1997*.
 - (26) Ferraris, *ibid.* p. 128.
 - (27) *ibid.* p. 126.
 - (28) ミヘルスの性愛論研究としては最近発表されたばかりの菊川氏の興味深い論文を参照せよ。菊川麻里「イタリア近代における性モラルの位相」『歴史学研究』No. 764, 2002年7月。
 - (29) Hamon, Augustin, “Socialisme et Anarchisme, in, *Dokumente des Sozialismus*, Vol. 51905, S. 537 の書評でも同趣旨の一文が見出せる。
 - (30) *Il Voto alla donne?—Inchiesta e Notizie*, —Pubblicazioni della Rivista Unione e Femminile, Milano 1905, p. 94. この抜き刷りは, トリノのエイナウディ財団の図書館に所蔵されている。)

ミヘルス文献目録 (1905)

- (A) "Opere di Roberto Michels" in *Studi in Memoria di Roberto Michels*, Annali della Facolta di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Seie V-vol/ XV, R. Uniersità degli Studi di Perugia. p. 39-76 にあるミヘルスの文献目録より, 1905年分。
125. *Dangers of the german socialist party*. 《The Socialist》, official organ of the Socialist Labour Party, vol. III, N. 29.
126. *Eine Psychologie der sozialistischen Bewegung*. 《Leipziger Volkszeitung》, 17. Jg. N. 3.
127. *Der 'gute Ton' im Klassenkampf*. 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 16. Jahrgang, N. 8.
128. *Cesare Lombroso als Politiker*. 《Leipziger Volkszeitung》, 12. Jahrgang, N. 20.
129. *Die Neubelebung der Gewerkschaftsbewegung in Italien*, 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 16. Jahrgang, N. 23.
130. *Karl Kautsky*. 《Avanguardia Socialista》, anno III (seconda seire), N. 111.
131. *Die Formen des Patriotismus*. 《Ethische Kultur》, XIII. Jg., N. 3. S. 18-19; Nr. 4, S. 26-28.
132. *A Sozialdemokrazia helzete németorszagban*. 《Huszadik Század》, Tarsada-lomtudományi Szemle, VI. Evfolyam, 2. Szam., pagg. 89-102, 3. Szam., pagg. 209-224, 5. Szam., pagg. 447-463.
133. *Le congrès des socialistes de prusse à Berlin*. 《Le Mouvement Socialiste》, IIe séire, VIIe année, N. 149, p. 239-251.
134. *Gli errori del partito socialista tedesco*. 《Il Pensiero》, Sociologia, Arte, Letteratura, ann III, N. 4, p. 56-58, N. 5, p. 69-71.
135. *Zum Kaptel Gewerkschaftsbewegung*. 《Leipziger Volkszeitung》, 12. Jahrgang, N. 41.
136. *Vorwärts mit Marx und Kant*. 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 16. Jahrgang, N. 48.
137. *La grève générale des mineurs de la Rhur*. 《Le Mouvement Socialiste》, II^e séire, VII^e année, N. 152, pagg. 481-489.
138. *Patriotische Anpassung und patriotische Märchen*. 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 16. Jahrgang, N. 89.
139. *Ein neues Buch über die alte Internationale*. 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 16. Jahrgang, N. 98.
140. *Pensieri sul primo maggio*. 《La Nuova Terra》, anno VIII, N. 18.

141. *Ein erster Mai in Rom*. 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 16. Jahrgang, N. 100.
142. *Konstitutionale und absolutistische Monarchie*. 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 16. Jahrgang, N. 100.
143. *Die deutsche Sozialdemokratie und Marokko*. 《Arbeiterzeitung》, 14. Jahrgang, N. 148.
144. *Landleute, Kinder und Frauen in Süditalien*. 《Neues Frauenleben》, XVIII. Jg., N. 6, S. 9-1.
145. *Over de 'Rechtvaardigheid' der Werkstaking*. 《De Nieuwe Tijd》, Sociaaldemokratische Maandschrift, 10^e Jaargang, N. 7 en 8, pagg. 480-484.
146. *Eine Erinnerung an Elisée Reclus*. 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 16. Jahrgang, N. 163.
147. *Etwas Grundsätzliches über das Zentrum*. 《Freie Presse》, Organ des Werktätigen Volkes von Rheinland und Westphalen, 22. Jahrgang, N. 167.
148. *Sozialdemokratie und auswärtige Politik*. 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 16. Jahrgang, N. 172.
149. *Die Eroberung der Macht*. 《Arbeiterzeitung》, 14. Jahrgang, N. 182.
150. *La giustizia dello sciopero e il socialismo marxista*. 《Il Divenire Sociale》, Rivista di Socialismo Scientifico, anno I, N. 15, pagg. 235.
151. *Iets over de betrekking tusschen ethiek en klassentsrijd*. 《De Nieuwe Tijd》, 10e Jaargang, N. 9, pagg. 598-607.
152. *De verovering der staatsmacht*. 《Levensrecht》, Maandschrift ter verbreiding der vrije ideeën, N 3, pagg. 65-68.
153. *The conquest of power*. 《The Social-Democrat》, a Monthly Socialist Review, vol. IX, N. 9, pagg. 521-524.
154. *Il problema coloniale di oggi e di domani*. 《Il Divenire Sociale》, anno I, N. 19, pagg. 307-8.
155. *Entwicklung und Rasse*. 《Ethische Kultur》, XIII. jg. N. 20 S. 151-157.
156. *Die Beziehungen Giuseppe Garibaldi's zum Sozialismus*. 《Dokumente des Socialismus》, Band V, Hefte 4, pagg. 183-186, Hefte 6, pagg. 275-279.
157. *Le socialisme allemand et le congrès de Iéna*. 《Le Mouvement Socialiste》, Estratto, 26 pagg.
158. *Le congrès syndical de Cologne*. 《Le Mouvement Socialiste》, II^e séire, VIIe annee, N. 158, pagg. 313-321.

159. *A propos de la Grève de la Ruhr*. 《Le Mouvement Socialiste》, II^e série, VII^e année, N. 158, pagg. 341-344.
160. *Russische Sklaverei und deutsche 'Freiheit'*. 《Rheinische Zeitung》, N. 277.
161. *Das Vaterland der Reichen*. 《Mitteldeutsche Sonntagszeitung》, 12. Jahrgang, N. 52.
162. *Die Dirne als die 'alte Jungfer' des Proletariats und die Prostitution*. 《Mutterschutz》, Zeitschrift zur Reform der sexuellen Ethik. 1905, I. Jg. H. 2,
163. *Kautsky e i rivoluzionari*, 《Il Divenire Sociale》, anno I, N. 21, pagg. 326-329.
164. *A Szocialdemokraczia helyzete nemetországban*. 《Huszadik Szazad》, Estratto, 41 pagg.
165. Der italienische Sozialismus. 《Volksstimme-kalender 1905》. Budapest, p. 49-56; anche nell'edizione ungherese: 《Nepszava Aptara 1905》, pagg. p. 85-91.

(B) (A)以外の論考

- ① *Violenza e legalitarismo come fattori della tattica socialista*, 《Il Divenire Sociale》, 16 gennaio 1905.
- ② *Il Socialismo ed il problema coloniale*. 《Il Divenire Sociale》, anno I, N. 22, 16 novembre.
- ③ *Il Voto alla donne?—Inchiesta e Notizie—*, Pubblicazioni della Rivista Unione e Femminile, Milano 1905,

(C) 書評

Dokumente des Socialismus (1903)

- ① Longobardi, Ernesto Cesare: “L’Influenza degli alti Salari sui Profitti secondo le Leggi dell’ Economie Marxista.”
- ② Puviani, Amilcare: “Teoria della Illusione Finanziaria.”
- ③ Visser, S. J.: “Over Socialisme.”
- ④ Hamon, Augustin: “Socialisme et Anarchisme.”